沢田内科医院 ニュースレター Vol.4

ニュースレターも 4 号を数えるようになり、軌道に乗ってきました。評判も上々のようで、中には次の号を待ち焦がれている人もいるようです。載せたい内容はたくさんあるのですが、診療の片手間に自分のところで印刷しているため、ページ数を増やしたり、発行回数を増やすことは現在のところ不可能です。しばらくは今のままで続けますが、状況に応じて内容も変えていく予定です。

世の中では殺人事件が多発しています。人の命に直接かかわる仕事に携っていると、戦争や殺人などのニュースを見ると、私たちがしている仕事に挑戦しているようにも感じられます。また、映画やテレビゲームでは命をもてあそんでいるような感じを受けます。簡単に人を殺すのは、子ども達が、人が亡くなる場面に立ち合わなくなったのもひとつの原因ではないかと考えています。
そこで、私たちの医院では、家族が亡くなる時には小さな子どもも部屋の中に入れています。家族が亡くなるのに立ち合わせて命がなくなる瞬間を心に残すことで、命の大切さを少しでも考えるきっかけにしてもらいたいと思っているからです。

この豚は、医院の玄関で皆さんをお迎えしています。五所川原のエルムの街で見つけてきました。外国産にしてはかわいい顔をしています。看護婦の一人の名前をもらって「マキ」あるいは「マキブタ」としましたが、誰も呼んでくれません。かえってその看護婦から「セクハラだ」と言われています。

私たちの医院の食事

食べるということは、生活する上でもっとも基本的なことです。病気で入院しているからといって軽視されていいことではありません。むしろ、何もすることがない入院生活では、一番の楽しみが食事であるということがあります。また、病気で食欲がないからこそ、食欲が出るように食事を工夫することが必要です。私たちの医院では入院中の食事に対してどのように考えているかを紹介します。

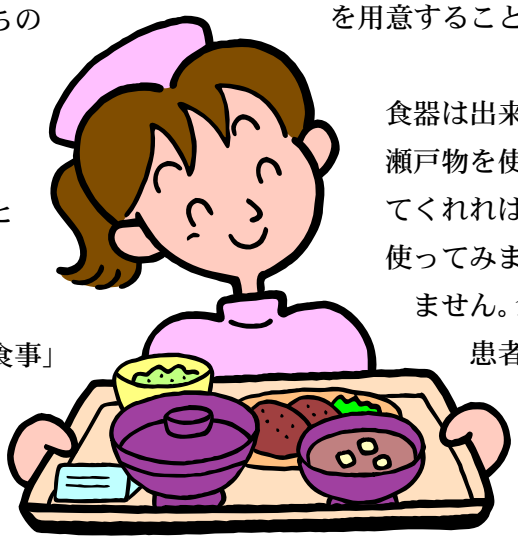
食堂から調理室で働いている熊谷さんと須藤さんが見えます

医院を設計する段階で、入院患者さんの食事を作る場所をどこにするかが問題になります。食事の材料を運びやすいこと、病室のスペースを広くしたいこと、においや騒音、これらを考えると入院病室は 2 階とし、給食施設は 1 階の目立たない場所に作ることになります。しかし、食べることは非常に大切なことですし、入院生活と直結することです。

（次ページに続く）

（前ページから続き）

そこで、私たちの医院では給食施設は2階の食堂のとなりに配置しました。そして、食事を作っている人たちとそれを食べてくれる患者さんがお互いに顔が見えるようにしました。このようにすると、どのような人たちが自分たちの食事を作っているのか、また、調理する側はどのような患者さんがどのように食べてくれるのかが分かります。また、病室と同じ階で仕事をしていますので、調理する人が入院患者さんから直接希望を聞いて「食べられる食事」を用意することができます。



糖尿病は別にして、病気で入院している人は食欲がないのが普通です。特に食欲がない患者さんには調理する人が病室を訪ねて希望を聞き、食べられるものを用意しています。同じ階にありますので病室を訪ねることは簡単ですし、患者さんがどのような状況なのかを調理する人も知ることができます。ソバを食べたい時には用意します。

梅干とおかゆだけのこともあります。場合によっては日本酒1合をつけることもあります。栄養のバランスがよくても、患者さんが食べてくれなければ何にもなりません。とにかく、患者さんが食べられる食事を用意することが私たちの医院の第一の目標です。

食器は出来るだけ家庭で使っているのと同じ瀬戸物を使っています。患者さんが喜んで食べてくれれば、少し壊れてもかまいません。実際使ってみますと、それほど壊れるものではありません。食堂でみんなと一緒に食べられない患者さんへは少し重いのですが、食事を部屋まで持って行きます。

ちなみに、食事時間は、朝が7時、昼が12時、夜が6時です。

調理職員は3人です。食べるのは毎日ですので、休日も関係なく交代で働いています。

現在の熊谷博人は2人目の調理師です。私たちの医院へ来る前はとんかつ屋で働いていました。病院給食の経験もあります。今富英、須藤タエの2人は開院した時から働いています。

菅谷先生とベラルーシの子ども達

1986年4月に起こったウクライナのチェルノブイリ原発事故のことはほとんどの人が知っていると思います。この放射能事故でとなりの国であるベラルーシが大きな被害を受けました。つまり、ベラルーシの子ども達の間で甲状腺がんが多発したのです。

信州大学外科助教授だった菅谷昭先生は、偶然にもテレビでそのニュースを知りました。甲状腺外科の専門医である菅谷先生は運命的なものを感じ、ベラルーシの子ども達の支援に立ち上がることになります。先生がベラルーシへ行った頃は甲状腺の手術手技そのものの指導が第一だったようです。その頃のベラルーシの甲状腺外科は、かわいい子ども達の首に大きな手術跡を残すという時代遅れの手技だったからです。

「ぼくとチェルノブイリのこどもたちの5年間」（ポプラ社）
「チェルノブイリ診療記」（晶文社）、菅谷先生の著書です。

菅谷先生の指導により、ベラルーシの甲状腺外科医の手技は飛躍的に向上しました。先生が活動拠点とした、ミンスク、ゴメリ、モーズィリの3ヶ所を結ぶ診療システムも期せずして作られました。また、菅谷先生がベラルーシの医師を教育したことは、放射線障害による甲状腺がんの診療だけでなく、ベラルーシ全体の甲状腺診療のレベルを向上させました。つまり、先生の活動は甲状腺がんに対する単なる医療技術の提供ではなく、ベラルーシ全体の医療に多大な貢献をしたことになります。

平成11年7月、モーズィリ市の少年少女音楽舞踊団“パレースカヤ・ゾーラチカ（パレーシア地方の小さな星たち）”が弘前市文化センターで公演を行いました。そして子ども達はホームスティをし、ねぷたや花火を楽しみ弘前の子ども達と交流しました。これは私が所属する「菅谷医師とベラルーシの子ども達を応援する会」が主催しましたが、菅谷先生がアレンジしたものでした。つまり、菅谷先生の外科医としての技術援助は単なるきっかけで、ベラルーシの甲状腺診療のレベルアップだけでなく、日本とベラルーシの人の交流にまで及び、そして、私たちのように日本にいて支援する人たちには放射線事故のことを考えさせるきっかけを作ってくれたことになります。

「パレースカヤ・ゾーラチカ」
弘前公演のポスター

菅谷先生が5年半の活動を終えこの6月に帰国しました。先生自身は、この5年間の活動から次のような感想を述べています。「自分ではお金で買うことのできないほど貴重でかつ有益な人生経験をさせてもらいました。この経験は、私の余生をうるおす飛び切り上等の財産になるでしょう」。私自身は「菅谷医師とベラルーシの子ども達を応援する会」の事務局メンバーとして活動する間に、エネルギー問題、特に原子力発電に対して深く考える機会を与えてもらいました。

このように、菅谷先生はベラルーシの甲状腺がんの子ども達とかかわる中で、この子ども達だけでなく、周りのたくさんの人達に大きな影響を与えました。帰国により先生のいう「自分探しの旅」が終わったわけではありません。これからも形を変えた旅が続きます。
私たちはこれからも支援を続け、菅谷先生が蒔いた種がすばらしい果実になっていくことを見守っていきたいと思います。

「菅谷医師とベラルーシの子ども達を応援する会」
弘前市の医師、歯科医師が中心となり、菅谷先生を支援するために結成した会。 代表は新寺町法源寺の藤森巍さん。菅谷先生へ医療器械を贈ったり、経済的な支援を行っています。
200名を超える一般会員の会費が主な収入源です。 一昨年は“パレースカヤ・ゾーラチカ（パレーシア地方の小さな星たち）”の弘前公演を主催しました。 今年は菅谷先生の講演会を企画しています。

菅谷先生の活動が分かるホームページ「モーズィリ絵手紙」
http://www.so-net.ne.jp/medipro/y-jiho/minsk/index.html

外来での小話

私の診断は正しかった？

高校1年の麻実ちゃんは、前の夜に胸が痛くなったため受診しました。心電図と胸の写真は異常ありませんでした。どのような状況で胸が痛くなったのかは非常に大切なことですので詳しく聞きました。

麻実ちゃんには翔平君という弟がいますが、前の晩は一人で冷たいアイスクリームを食べた後に痛くなったことが分かりました。そこで、私は、アイスクリームに原因があるのではないかと判断し、「アイスクリームを食べる時は、独り占めしないで、弟にも分けてやるように」とアドバイスして帰しました。

その後、自転車で元気に通学している麻実ちゃんは胸は痛くならないと言っていました。速く通り過ぎてしまったため、アイスクリームは弟と仲良く食べているかは確認できませんでした。

蜂に刺されたら「よだれをつけておけばいい」

肝臓の治療で通院している工藤さん（？歳、女性）はお寺の草取りの仕事に行っていました。最近の暑さで、仕事はきつそうです。話の中で、ハチに刺されることがあるので、刺されたら治療してもらえるかと質問されました。

私が子どもの頃は、転んですり傷ができたり、ハチに刺されたりした時にはツバをつけておいたことを思い出しました。そこで、私は「ハチに刺されたくらいなら“よだれ”をつけておけばいい。病院には来なくてもいい」と答えました。そうしたら、工藤さんは「“先生のよだれ”でねばだめだから、やっぱり病院に来る」と。みんな大笑いでした。

注：ハチに刺されて息が苦しくなったり、痛みが強い時はよだれだけでなく、受診してください。

医院のホームページもご覧ください。
このニュースレターの内容はホームページと重複している部分が多数あります。

診療時間

	月	火	水	木	金	土	日
9:00~12:30	診療						休診
12:30~ 2:00	昼休み		休診	昼休み		休診	
2:00~ 6:00	診療			診療			

※時間外と休日は電話(37-7755)でご連絡をお願いします。
入院病棟に必ず看護婦がいます。

所在地

発　　行：　〒036-8261 青森県弘前市茂森新町 1-6-4　沢田内科医院　院長　沢田美彦
ホームページ：　http://www.jomon.ne.jp/~ysawada/　　TEL 0172-37-7755　FAX 0172-37-7788